

【阿修羅】 あしゆら(その2)

天平六年(734)聖武天皇の後・光明皇后は実母である橘三千代(藤原不比等夫人)の一周忌に興福寺西金堂を建立しました。

西金堂の本尊は釈迦如来坐像、その周りには脇侍菩薩像、釈迦十大弟子像、梵天・帝釈天像、四天王像、八部神王像(以下、八部衆という)などを配し浄土変相を構成していました。残念ながら西金堂は今はなく再建計画中です。

かの有名な興福寺の阿修羅像はこの八部衆の一軀です。

<http://ww81.tiki.ne.jp/~morikawaakir/newpage121.htm>

古代の仏像のほとんどが作者不詳である中、この堂の諸仏は仏師將軍万福の指導により造られたことがわかっています。(『正倉院文書』造佛所作物帳)

今は失われた西金堂の様を知るには鎌倉時代に描かれた<興福寺曼荼羅>の西金堂の図が参考になるでしょう。

<http://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/meihin/kaiga/butsuga/item04j.html>

私は初めてこの図を見たとき、極めて優秀な十大弟子と、善神とは言い難い八部衆との組み合わせが不可解でなりません。しかも阿修羅の宿敵帝釈天も一団の中に加わっているのです。西金堂より古い法隆寺金堂壁画の釈迦浄土変相図には八部衆は描かれていません。阿修羅など八部衆を加えた興福寺西金堂は何を意味しているのでしょうか。

興福寺諸堂は歴史の荒波の中で過酷な運命をたどります。

建立から三世紀半、度重なる火災の中でも最も大きな試練が興福寺を襲います。

平安時代末期の治承四年(1180)十一月二八日、反平家勢力であった東大寺・興福寺は平重衡の焼き討ちにあい伽藍のほとんどを失ってしまいました。興福寺西金堂も例外ではありません。

軽量の乾漆像であることも幸いしたのでしょうか、本尊を焼失しながらも十大弟子の内6軀と八部衆は戦火の中を運び出されて現存しています。

興福寺 阿修羅像は純心潔癖な美少年の容姿をしています。

三面の表情には阿修羅の本質である怒りなど微塵も感じられず、穏やかながら何か決意を秘めた表情のように見えます。己の活力を仏法に捧げようと決意した刹那なののでしょうか。

十大弟子はいずれも肘を張らずに脇をしめた立ち姿をしています。

<http://www.kohfukuji.com/cgi-bin/kohfukuji/dispdata.cgi?id=but00009>

これは本尊の周りの限られた空間に数多くの像を配置するため、浄土変相図的群像表現といえましょう。

それに対し、阿修羅像は六臂(ろっぴ=六本の腕)により大きな空間を構成しています。居並ぶ群像の後方にいて印象的であったことでしょう。

合掌する二臂を除いて、残りの四臂には当初持物があつたはずですが、二臂で日月を上段に掲げ、中段の二臂で弓矢を持つのが阿修羅の図像です。太陽神・好戦的の神という彼の経歴を物語ってい

ます。

奈良時代の仏像は前期の作例ほど若々しく、後期に至るに従って壮年の風貌となっていく。東大寺法華堂諸仏の壮年の顔立ちと比べると、若々しい興福寺像との時代の差は一目瞭然です。天平仏の美しさは普遍的理想美といわれています。普遍的理想美とは、当時の人々が共有できる共同体的美意識を意味します。価値観の多様化した現代では考えられないことです。

地方分権・民営化を目指す現代とは逆に、当時はゆるぎない中央集権国家の完成を理想としていました。

この世に混沌と存在するあらゆるものを国家秩序の下に再編しようとする政治的理想は、悪神すら仏法の秩序の下に取込もうとする宗教的理想と同質のものです。

このような時代感覚を古代網羅主義というほか適する言葉を私は知りません。

碁盤の目状に張り巡らした条理制都市計画も、東大寺を本山とし全国に国分寺を建立した国家鎮護仏教も、春秋・山川・朝夕などを対に捉えシンメトリックな世界を詠みあげた赤人の歌も、あらゆる地域・階層の歌を網羅した『万葉集』の編纂も全て共通した感覚といえましょう。

弾圧の対象であった行基の力をも結集し大仏建立に当たらせた聖武天皇の政策は、悪神阿修羅をも釈迦の傍らに置いた興福寺西金堂から想を得たのかもしれない。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~